

3. 墓守

ディオニシアとネフェルニシア、現代に蘇った死霊使いの姉妹は、もともとはレンダーシア大陸、アラハギーロ王国が興る以前に、デフェル荒野で栄えていたとある王国に仕えた、墓守の一族である。



ただの墓守ではない。その時代よりさらに古代に栄えた、高度に発達した魔法文明の血を引くと云われる一族である。言い伝えによればその古代文明の王家の者は時を操り、未来を見通す目を持っていたともいわれるが、姉妹の一族にもわずかながらその能力が引き継がれたらしく、流れついた一族は王に見出され、最初は占い師として仕えたが、やがてその能力の高さから、王家の神事全般を司るようになった。

歴代の王は栄華を極め、とうとう不死までも願うようになった。一族はその願いにこたえ、死した肉体を保存しそこに魂を縛りつけ、いずれ未来に復活する術法を編み出した。そののちは王家の墓地の管理を任され、ゆえに墓守の一族と呼ばれるようになった。

王家が途絶え、国が滅んだ後も、来るべき王たちの復活の日のために、一族は王たちの霊廟を守り続けた。

墓守たちは遙か古代に滅びた魔法文明の、わずかに残った技術や知識を継承することを、至上の目的としていた。王たちの復活を迎えることは、それを証明するための一大事業となり、過酷な砂漠での生活を何百年も続けていた。

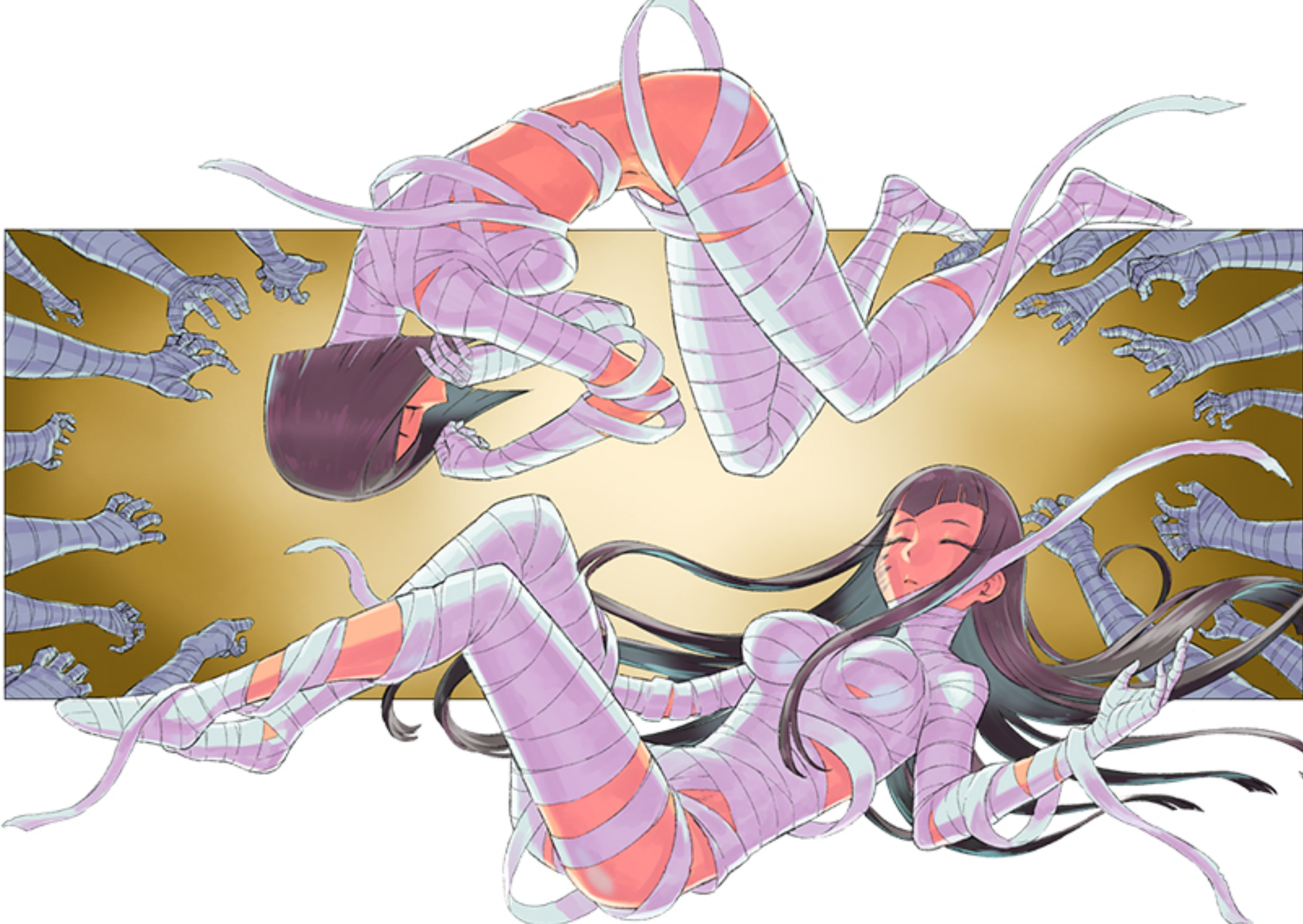
ある時、二つの予言がもたらされた。一つは一族に滅びが訪れるというもので、過去に古代文明を滅ぼした怪物が、一族の血にひかれて時を超えて迷い出るというのである。その怪物の能力に一族は決して抗することができず、血の匂いを覚えられていて逃げることもできない。

もう一つの予言はその怪物に唯一対抗できる存在。一族の血をより強く受け継いでいる英雄が、遙か未来に現れるというものだった。それは、かつて古代文明が失われようとした時期に、時を超えて滅びを免れた王族の赤子だということである。

時を超え垣間見た未来であるとともに、一族の血に刻まれた記憶が読み取られたとも解釈され、その予言は信憑性が高いと思われた。そこで一族の長老たちは考えた。未来に現れるであろうその英雄を、時を超える能力を操れるようにまで導き育て、この時代にまで招いて一族を救ってもらおうというのだ。

そのために、未来に対して使者を送る必要があった。一族の血は今や薄まり。もはや時を渡るような力はない。しかし王たちに施した法術に近い呪いを肉体に施して、不死者として未来に残すことはできる。「死んで」いる間は地下深い霊廟に隠してしまえば、怪物の追跡からも逃れられるというのである。

それは未来への片道切符であり。用が済んでしまえば縁もゆかりもない時代に不死者として放り出される、非情な使命であった。しかし、長らく墓守として不死者と向かい合ってきた一族の死生観はどこか倒錯していて、そのような方法も抵抗なく是認された。



そこで白羽の矢が立ったのがディオニシアとネフェルニシアの姉妹だった。2人は一族の中でも特に魔術の素養が高く、巫女へと推挙された少女たちで、不死の呪いにも良く適合すると考えられた。

姉のディオニシアは使命に従順であったが、妹のネフェルニシアは一族のありように疑問を持っていた。だが姉を深く愛しており、姉のいなくなる今の時代に残るくらいならと、しぶしぶ承諾したのであった。

そして今に至る。

ネフェルニシアに施された呪いは完全には働かず。長い間肉体を保全することができずにディオニシアが目覚めたときには完全に砂になってしまっていた。彼女は妹が失われたことを深く悲しんだが、そのことでかえって氷のような心で使命に邁進するようになった。復活して数年でこの時代のことを調べ上げ、予言と照らし合わせることによって、探し求める英雄が、勇者の盟友になることや、いずれ竜族とも関わるであろうということも推測していったのである。

いずれ邂逅が予定されていた地、ランガーオ村に伝わっていたはずの「ラーの鏡」が盗掘により紛失していた時は、それを取り戻すために村の青年アロルドとともに奔走したりもした。

しかして、最後のエテーネである少年ユルールは、オーガとして新たな生を受けて、村に姿を現した。ディオニシアは早速彼のもとに駆け付け、さらに放浪の薬売りアマセと、武者修行の武闘家ヨナを加えた奇妙な旅が始まった。

冒険者としての馴れ合いは、最初彼女には馴染まないものだった。ただ身命を賭して英雄に仕え、守り導くことが彼女の全てだった。なので、カミハルムイの王家の過去にまつわる騒動で、怪蟲アラグネにユルールが刺し貫かれそうになった時も、迷わず身を投げ出して彼を庇った。

不死の呪いにより、彼女は外傷ではそう簡単には滅びない。胸を貫かれながら、また少し自分の使命にまつわる秘密が露呈してしまった。どう言いつくろうべきか・・・、その時彼女が気になったのはその程度のことだったが、復活した彼女をユルールは抱きしめ、わんわんと泣いてくれた。

霊廟で眠りにつく前、妹と抱き合ってから、長らく失われていた心の熱が、胸の中に再び灯って行くかのようにだった。それ以来、ディオニシアの旅の目的は、本来の形から随分と膨らんできている。今は目の前の少年の冒険の行きつく先を、一人のただの人間としても見届けてみたいのだった。

そして今、心に夢を灯したディオニシアの前に、妹という形で現実が再び選択を迫ってきている。彼女の旅もまた、終末が近づいているのであった。

